

職員リレーエッセイ

映画「ボヘミアン・ラブソディ」を観て

ニコニコデイサービス鶴里 生活相談員 服部恵美子

昨年末のお休みに、主人と話題の映画「ボヘミアン・ラブソディ」を観てきました。当日券は高いけど、まあしょうがないかと思いつつ調べてみると、「夫婦50割引」というものがあるではないか！夫婦のどちらかが50歳以上であれば、お安くなるというもの。嬉しい反面、歳を取ったなと複雑な心境になりながら、割引料金は素直に受け入れるのでした。「熱烈なクイーンファンです」とは言わないけれど、映画の中では耳慣れた曲が心地よく、とても懐かしく楽しめました。

初めて洋楽に触れたのは、小学生の頃だったと思います。クラスの友達が見せてくれたアイドル雑誌に、タータンチェックの衣装を着たイギリスのアイドルグループ「ベイシティローラーズ」が載っていたのを覚えています。どうやって曲を聴いたのかは思い出せないけど、ノリのいい音楽に、日本の歌謡曲とはちょっと違う世界を感じたのでしょね。

その後、徐々に洋楽に興味を持ち、ラジオの音楽番組ばかり聞くようになりました。三河の片田舎にもレコード店はありましたが、レコードは高くとても手が届かないので、新聞のラジオ欄をチェックして、ラジカセから流れる音楽をカセットテープに1曲1曲、「ガッチャン」とボタンを押して録音してました。ラジオのDJが曲の途中でしゃべり出してしまい録音できず・・・なんてこともあったりと、なんともアナログな時代でした。ああ、懐かしや。今の時代はいいですね。スマホで簡単に好きな曲を好きな時に聴けるから羨ましいです。

1991年、クイーンのボーカリスト、フレディ・マーキュリーがエイズで亡くなったことは大きな衝撃でした。まだ若かった私には「死」というのは遠い存在でしたが、親しんで何度も聴いたミュージシャンの「死」は、遠いながらも、なんだかぼかんと穴があくような「喪失感」を感じました。それから、マイケル・ジャクソンもカート・コバーンもデビッド・ボウイもプリンスもあちらの世界に行ってしまいました。忌野清志郎も大滝詠一も、今頃あちらで何をしているでしょう。

気が付けば、「死」はいつの間にか、他人事ではなく、より身近なものになってきました。「夫婦50割引で得したわー、へっへっへ。」なんて喜んでいる場合じゃありません。人生後半戦です。肩こりにも老眼にも負けず、まだまだこれからも前進していきたいものです。

いつまでもロックな精神を忘れず、がんばるべ。

次は、わははの井上さんへ繋がります。